

COLUMN

連載 81
仕事について考える

札幌大谷大学社会学部
教授 平岡祥孝

2017年 を振り返れば
色々な出来事が
よみがえってきます。

ところで、高校生も大学生も人手不足を追い風に、新卒採用では売り手市場が続いています。仕事さえ選ばなければ誰でも職に就ける完全雇用の状態です。厚生労働省の発表によれば、初任給も4年連続の増加で過去最高を更新し、北海道では大卒19万4100円、高卒が15万4100円でした(『北海道新聞』2017年11月16日朝刊)。

日本生産性本部が実施した本年度の「新入社員意識調査」では、「働く目的」は「楽しい生活をしたい」が42.6%で過去最高。一方で、「社会の役に立つ」は9.2%です。また、「若いうちは進んで苦勞すべきか」との質問に対しては、「好んで苦勞することはない」との回答も過去最高の29.3%でした(『北海道新聞』2017年11月23日朝刊)。

格差社会この批判もあるもの、ほとんど満たされている豊かな社会で育ったゆえの安定志向の若者

気質と言え、それまでか。五木寛之の代表作『青年は荒野をめざす』は、もはや忘却の彼方にあり、古典文学作品。ただ、たまに雲の間から晴れ間に心安らぐことしかなかったような、ほろ苦い私学教員人生を二十数年何とか生き抜いてきた者としては、やはり一抹の寂しさを禁じえませぬ。

北海道経営未来塾で講演された矢野龍・住友林業会長は、リーダーには「高邁な志」すなわち「目標到達の過程で、自分の行っていることが人や社会の役に立っているかどうか」を前提に考えることを求めています(『北海道新聞』2017年11月26日朝刊)。いやしくも職業人であるならば、「高邁な志」の域に達しなくとも、仕事動機については「純粋な働く志」を心の片隅に置いて働いてほしいものです。日常の仕事に取り組む姿勢や態度の根底には、それぞれの人生観や価値観が反映された「仕事哲学」が存在していると思います。キャリアアンカーなどと大袈裟なことを言う必要もないでしょうが、人生の長きにわたって働くことが必要となる時代を迎えて、せめて新人さんには若者らしく「誰かの役に立ちたい」とこころういは臆せず

に語ってもらいたいですね。もちろん経済的自立のために労働の対価として報酬を得ることは、

至極当然のことです。ですが、働くことの意味を深く考えることなく、謙虚さや素直さを忘れた夜郎自大の新人さんも少なからずいるのでは。仕事の評価は、自分自身ではなく他者がするものだ。老婆心ながら彼ら彼女らに一言言わせてもらえば、仕事をなめて、いい加減に取り組んでいると、そのしつぱ返しは大きいものになります。

あえて自戒を込めて言うならば、学校現場におけるキャリア教育にも問題があるかもしれません。正規雇用を前提にしつつ就業力向上を目指す「ワークキャリア」に偏重する傾向も無きにしも非ず。たとえば大学では、就職実績⇨出口評価が、高等学校の教員や生徒の保護者からの評価⇨入口評価に直結する冷徹な現実を直視するならば、正社員就職率を意識せざるを得ません。しかるに、働くことを含めた生き方自体を考える「ライフキャリア」の視点も大切にしなければならぬと、痛感することにも、反省しているわが身です。



【ひらおか・よしゆき】札幌大谷大学社会学部教授。英国の酪農経営ならびに牛乳・乳製品の流通や消費を研究分野としている。女子学生の就職支援やインターンシップ事業に携わってきた経験から、男女共同参画、ワーク・ライフ・バランス、仕事論、生涯教育などのテーマを中心に、講演やメディアでも活躍。

ARTS



みんなげんき！

子育て支援センターのみんな
みんなで「はっくんワンちゃん」を
作りましたよ。
たくさんの方に参加していただき、
親子で楽しく
制作に取り組んでいました。
ワンちゃんの口の中に
上手にエサを入れられるかな～！
いっぱい遊んでください☆
🍒🍒🍒🍒🍒🍒🍒🍒